

西都市埋蔵文化財発掘調査報告書第36集

市内遺跡発掘調査概要報告書VIII

西都原地区遺跡
日向国分寺跡

2003

宮崎県西都市教育委員会

序

西都市教育委員会では、市内遺跡発掘調査として平成7年度より日向国分寺跡確認調査、平成10年度より西都原地区遺跡確認調査を実施しております。本書は、それら遺跡調査の概要報告書であります。

今回の調査で西都原地区遺跡につきましては、縄文時代早期の集石遺構をはじめ弥生時代の住居跡などを検出することができました。

また、日向国分寺跡では、昨年度までの調査で主要伽藍に取り付く東西門、南東側に塔跡、南側に南門、北東側に2時期の掘立柱建物が想定され、今年度は寺域確認の目的で南から西にかけての寺域と推定されている一帯の確認を目的に調査を行いました。寺域は宅地化などの理由から調査箇所が確保ができず苦慮しましたが、南西端に国分寺と地割りを併にする溝状遺構が確認され、また、回廊南西端にも多くの遺物や遺構を確認できるなど大きな成果を得ております。

これら調査により得られた成果は、西都市の古代史解明のためには極めて重要なものです。

本報告が考古学研究のみでなく、社会教育や学校教育の面にも広く活用されるとともに、埋蔵文化財に対する理解と認識を深めるための資料となれば幸いと存じます。

なお、調査にあたりご指導・ご協力いただいた調査指導の先生方、宮崎県教育庁文化課をはじめ、発掘調査・整理作業にたずさわっていただいた方々、並びに地元の方々に心から感謝申し上げます。

平成15年3月31日

西都市教育委員会

教育長 黒木 康郎

例　　言

1. 本書は、西都市教育委員会が国庫補助を請け、平成14年度実施した市内遺跡発掘調査の概要報告書である。本書には、平成13度実施し発掘調査期間の関係で記載できなかった日向国分寺跡第7次C区の結果についても記載する。
2. 平成14年度の確認調査は、西都市大字三宅字西都原に所在する西都原地区遺跡内（たばこ耕作に伴う天地返し地点）、西都市大字三宅字国分に所在する日向国分寺跡の2地区を対象に行った。調査は平成14年6月3日から平成15年1月17日まで行った。
3. 発掘調査は、西都市教育委員会が主体となり実施した。
4. 調査及び図面作成等については義方政幾・笠瀬明宏が担当した。
5. 本書の執筆・編集は、第I・II章は義方政幾・笠瀬明宏、第III章は義方政幾、第IV章は笠瀬明宏が担当した。
6. 本書に使用した方位は、Fig. 1・2・10が平面直角座標系第II座標系であり、Fig. 3～6・8・11～13は磁北である。この地点の磁北は真北より $5^{\circ} 25'$ 西偏している。
7. 本書に使用した標高は海拔絶対高である。
8. 報告書に用いた色調については、農林水産省農林水産技術会議事務局ほか監修の『新版 標準土色帳』に準拠した。

目　　次

挿図目次

第I章 序説	1	Fig. 1 西都原古墳群周辺位置図
第1節. 調査に至る経緯	1	Fig. 2 西都原地区遺跡調査地点位置図(s=1/10,000)
第2節. 調査の体制	1	Fig. 3 第65地点遺構分布状況(s=1/400)
第II章 遺跡の位置と歴史的環境	2	Fig. 4 第65地点集石遺構実測図(s=1/40)
第III章 西都原地区遺跡の調査	4	Fig. 5 第65地点1号住居跡実測図(s=1/80)
第1節. 調査区の設定と概要	4	Fig. 6 第65地点2号住居跡実測図(s=1/80)
第2節. 調査の記録	6	Fig. 7 第65地点出土遺物実測図(s=1/4)
第3節. 小結	11	Fig. 8 第74地点住居跡実測図(s=1/80)
第IV章 日向国分寺跡の調査	12	Fig. 9 第74地点出土遺物実測図(s=1/4)
第1節. これまでの調査結果と概要	12	Fig. 10 日向国分寺跡第8次現況平面
第2節. 調査区の設定と遺構・遺物	14	及びトレンチ配置図(s=1/1,000)
第3節. 小結	20	Fig. 11 第7次C区及び平成元年度 報告書抄録 調査遺構遺物実測図(s=1/200)
		Fig. 12 第8次A区1トレンチ遺構実測図(s=1/100)
		Fig. 13 第8次B区2トレンチ遺構実測図(s=1/60)
		Fig. 14 日向国分寺跡第8次出土遺物実測図(s=1/3)

第Ⅰ章 序 説

第1節. 調査に至る経緯

西都原地区遺跡の発掘調査については、たばこ耕作の天地返しに伴い実施したものであり、平成10年度からの継続事業である。このことについては、天地返しの地下構造に与える影響は大きく、遺跡の消滅が懸念されることから、たばこ耕作組合と協議を重ねてきたが、生産者の生活権等を考慮すると現状保存が困難であると判断し、重要な遺構・遺物が検出された場合には現状保存を前提とした協議をすることを条件に本年度も調査を実施することとなった。

調査は、新たに天地返しが予定されている12箇所(第69～80地点)の試掘調査と昨年度に堅穴式住居跡及び焼窯群を検出した第65地点の本調査であり、調査期間としては、たばこの準備及び他耕作物との関係で平成14年8月～平成15年1月までの間で調整しながら進めることになった。

一方、日向国分寺跡の調査は、西都市教育委員会が調査を始める以前に3度調査が行われた。

まず^a、昭和23(1948)年に駒井和愛教授を団長とした、主として早稲田大学で組織された日向考古調査団によって行われた。⁽¹⁾その後、昭和36(1961)年及び平成元年度には宮崎県教育委員会によって^b発掘調査が実施されたが、僧坊跡ないし食堂跡(平成元年度)⁽²⁾と推定される2時期の掘立柱建物以外には、その主要伽藍配置について明確にされていない。

当地域は、当時の報告書の周辺写真と現在では寺城内外の宅地化が著しく、畑地や空き地の確保も困難となり、伽藍配置の確認が急務である。このことから、西都市教育委員会が平成7年度より^{(4)～(5)}主要伽藍配置及び寺城の確認調査を実施してきた。本年度も、この継続として調査を行った。

※(註)は第Ⅱ章参照

第2節. 調査の体制

調査主体 教育長 黒木康郎

文化課長 阿万定治

同補佐 奥野拓美

同主事 鹿嶋修一

同主事補 津曲大祐

調査員 文化課係長 養方政幾

同主事 签瀬明宏

調査指導 日高正晴(西都原古墳研究所長)

第Ⅱ章 遺跡の位置と歴史的環境

西都市街地の西方、標高50～80mには通称西都原と呼ばれる台地がある。台地上には前期古墳を含む前方後円墳30基・方墳1基・円墳278基の大小古墳で構成された特別史跡・西都原古墳群が所在する。また、南九州独自の墓制である地下式横穴墓も現在までに12基、羨道が深く掘り込まれ地下式横穴墓と折衷型とされるタイプの酒元ノ上横穴墓群も確認されている。

この西都原台地は、九州山地から南南東に向かって舌状に細長く延びた洪積世台地で、その南端には彦土神の三宅神社が創建している。その神社地域から急坂を下ると、上尾筋・下尾筋遺跡の所在する標高30m程の中間台地になり、さらに下ると標高12m程の沖積平野へと至る。

西都原地区遺跡は西都原台地状に所在し、寺原・丸山・原口・西都原遺跡の4遺跡を総称した呼称である。原口遺跡は台地南側、寺原遺跡は原口遺跡の北側に位置し、丸山遺跡は台地北側、西都原遺跡は台地中央部の東側に位置している。これら遺跡内からは、丸山遺跡で縄文時代早期の焼磧群、原口第2遺跡からは古墳時代後期の堅穴式住居跡2軒、寺原第1・4遺跡からは弥生時代終末の堅穴式住居跡3軒などが確認されている。また、同台地北東端の新立遺跡では、弥生時代終末から古墳時代初頭の堅穴式住居跡20軒などが検出されている。

一方、日向国分寺跡は、西都原台地と西都市街地の中間台地に位置し、北・東側は断崖、西側は西都原台地、南側は谷に囲まれている。また、北方600m程にある妻高等学校敷地内には同尼寺跡も保存されており、本地域は古代にも重要な地域とされ、今なお多くの遺跡が遺存している。

また、国分両寺は国府の近くに置かれるのが全国的な通例であり、近年、国分寺跡から北東に直線距離で約1.2kmの寺崎・法元地区に、宮崎県教育委員会の調査により日向国衙跡が確定された。⁽¹⁾

このように、西都原台地上はもちろん、日向国分寺跡を含む中間台地は古代日向国の拠点として栄えた歴史的環境をもつ地域であったと思われる。

(註)

(1) 松本 昭「宮崎県日向国分寺」『日本考古学年報』I 日本考古学協会編纂 1949

(2) 宮崎県教育委員会「日向国分寺址」『日向遺跡総合調査報告』第3号 1963

(3) " 『国衙・都衙・古寺跡等遺跡詳細分布調査報告』III 1991

(4) 西都市教育委員会「遺跡所在確認調査に伴う市内遺跡発掘調査概要報告書！」

『西都市埋蔵文化財発掘調査報告書』第23集 1996

(5) " 『市内遺跡発掘調査概要報告書II』『西都市埋蔵文化財発掘調査報告書』第25集 1997

(6) " 『市内遺跡発掘調査概要報告書III』『西都市埋蔵文化財発掘調査報告書』第27集 1998

(7) " 『市内遺跡発掘調査概要報告書IV』『西都市埋蔵文化財発掘調査報告書』第28集 1999

(8) " 『市内遺跡発掘調査概要報告書V』『西都市埋蔵文化財発掘調査報告書』第29集 2000

(9) " 『市内遺跡発掘調査概要報告書VI』『西都市埋蔵文化財発掘調査報告書』第30集 2001

(10) " 『市内遺跡発掘調査概要報告書VII』『西都市埋蔵文化財発掘調査報告書』第31集 2002

(11) 宮崎県・西都市教育委員会「西都原地区遺跡」『西都市埋蔵文化財発掘調査報告書』第22集 1996

(12) 西都市教育委員会「新立遺跡」『西都市埋蔵文化財発掘調査報告書』第18集 1992

(13) 平成12年3月に宮崎県教育委員会より国衙跡と確定された。現在、国指定申請に向かっている。



1. 西都原古墳群 2. 御陵墓（男狭穂塚・女狭穂塚）
 3. 丸山遺跡 4. 西都原遺跡 5. 寺原遺跡（西都原地区遺跡）
 6. 新立遺跡 7. 原口第2遺跡 8. 日向國分寺跡
 9. 日向國分尼寺跡 10. 酒元遺跡 11. 寺崎遺跡（日向國衙跡）

Fig. 1 西都原古墳群周辺位置図

第三章 西都原地区遺跡の調査

第1節 調査区の設定と概要

西都原地区遺跡については、これまでに、圃場整備や道路拡幅等に伴う発掘調査が行われ、調査の結果、縄文時代早期の集石遺構及び焼穢群をはじめ、弥生時代中期の竪穴式住居跡や古墳時代前期の竪穴式住居跡群、さらには、横穴墓と地下式横穴墓との折衷形として注目された古墳時代後期の横穴墓などを検出した。これらは位置的には、そのほとんどが西都原台地縁辺部に集中しており、台地中央部からは弥生時代の竪穴式住居跡などが検出されているものの、密度的にはかなり低いことが判明している。また、古墳の築造に関連した人々の遺構が確認されなかつたことから、台地上特に陵墓の東側を中心とした地域は古墳を築造する特別な空間、いわゆる聖域として認識していたものと想定される。なお、このなかで横穴墓については、現在、県文化課が主体となって進められている「地方拠点史跡等総合整備事業」(歴史ロマン再生事業)のなかで保存・活用されることとなり、「西都原古墳群遺構保存覆屋」が建設され、現在一般公開されている。

この「地方拠点史跡等総合整備事業」(歴史ロマン再生事業)は平成7年度から進められている事業であり、これまでに「鬼ノ宿古墳」「13号墳」などの保存整備が図られ、平成16年度の西都原考古博物館(仮称)の完成で事業完了となる予定である。

このような中、本年度については、これまでと同様に天地返しが予定されている陵墓の西側及び南側、そして、県立西都原資料館の東側の圃場整備された畠地の確認調査と、昨年度に焼穢群や竪穴式住居跡を検出した第65地点の本調査を行った。

確認調査は、アカホヤ火山灰層を中心に行ったが、アカホヤ火山灰層の遺存率は全体の2/3程度で良好であった。調査地点は、12地点(第69地点~80地点)で、調査対象区域の面積も約60,500m²と広範囲で苦慮したが、幅2mのトレチを6~10m間隔に設定して遺構・遺物の遺存状況等の確認を行った。そして、遺構・遺物が確認された場合には、トレチを状況に合わせて拡大して範囲等の確認を行った。また、アカホヤ火山灰下層の文化層については、トレチ内に幅2m・長さ2m程の小トレチを設定して確認を行った。調査の結果、第69地点から焼穢群や竪穴式住居跡2軒、第74地点から弥生時代終末頃の竪穴式住居跡1軒、第72地点から時代は不明であるが掘立柱建物跡1棟等を検出した。

本調査は、遺構が集中している部分1,200m²が対象であり、調査の結果、縄文時代早期の集石遺構7基、弥生時代後期前半の竪穴式住居跡3軒を検出するなど、少しずつではあるが西都原の謎を解く資料が得られ、大きな成果を上げることができた。

これら検出した遺構については、これまで同様地権者の方と保存について協議を重ねたが、第74地点の竪穴式住居跡のみ保存することで合意に至り、その他は現状保存が困難と判断したことから記録保存後工事実施となった。

なお、第69地点については、今回新たに竪穴式住居跡を2軒検出し、さらに、焼穢群も検出したことにより遺跡の広がりが確認できたことから、地権者と協議を行った結果、来年度に本調査をすることに合意に至った。



Fig. 2 西都原地区遺跡調査地点位置図 (1/10,000)

2 節 調査の記録

1. 遺構と遺物

・本調査（第65地点）

〈集石遺構及び焼穢群〉

第65地点から集石遺構7基及び焼穢群(Fig. 3)を検出したが、穢はいずれも火を受け、赤く変色している。集石遺構は、深い堀込みを有するタイプのものと、ほとんど有しないタイプのものがある。5号集石遺構(Fig. 4)は堀込みを有しないタイプ、6号集石遺構(Fig. 4)は深い堀込みを有するタイプで、底面には配石を施している。また、規模的には、径0.7m~1.8mで、穢が密に集積されているものと、集積されていないものがある。

これら集石遺構の時期については、遺物が全く出土していないが、アカホヤ火山灰下層からの検出であり、また、この第65地点は平成5年度の圃場整備に伴う調査にて集石遺構及び焼穢群を検出した地点（E区）と同畑内で、その際、貝殻条痕文土器等が出土していることから、縄文時代早期のものと推定される。

〈竪穴式住居跡〉

アカホヤ火山灰層面にて、竪穴式住居跡3軒(Fig. 2)を検出した。

1号住居跡(Fig. 5)は、長軸6.06m・短軸4.60mの規模を有する長方形プランのものであり、東辺中央には内側に突出壁、南辺西部は外側に長方形状に張り出している。検出面からの深さ0.26m前後を計り、床面は平坦で、主柱は2本である。遺物は、壺形土器や壺形土器などが出土している。壺形土器は口縁部が「く」字状に外反しているもの(Fig. 7-1)で下がり気味の突帯を有している。底部はあげ底(Fig. 7-5)である。量的には少ないが、壺形土器(Fig. 7-3)や鉢形土器(Fig. 7-4)も含まれている。時期は、出土土器の特徴から弥生時代後期前半頃のものであると推定される。

2号住居跡(Fig. 6)は、長軸6.10m・短軸5.60mの規模を有する方形プランのもので、検出面からの深さ0.18mを計る。床面は平坦で、主柱は2本である。遺物は、口縁部が「く」字状に外反し突帯に刻目が施された壺形土器(Fig. 7-6)や動先状口縁に鋸齒状の刻線を有する壺形土器(Fig. 7-7)などが出土している。底部は壺形土器のもの(Fig. 7-8・9)であげ底である。時期は山上上器の特徴から弥生時代後期前半頃と推定される。

3号住居跡は、長軸5.34m・短軸3.92mの規模を有する長方形プランのもので、検出面からの深さ0.30mを計る。床面は平坦で、主柱は2本である。時期的には、遺物はほとんど出土しておらず、判断しにくいが、検出状況等から1号・2号と同様弥生時代後期頃と推定される。

②試掘調査（第69~80地点）

〈焼穢群〉

焼穢群は、第69地点から検出している。焼穢は全体的に散布しており、周辺には集石遺構の存在

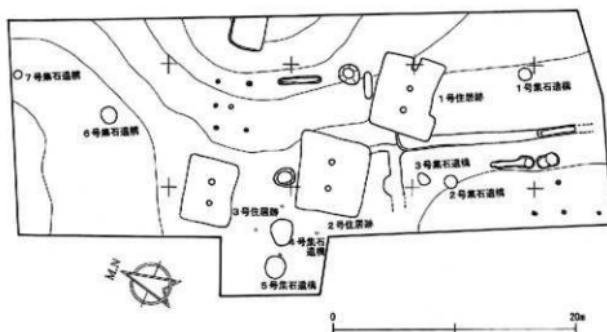


Fig. 3 第65地点 遺構分布状況 ($S=1/400$)

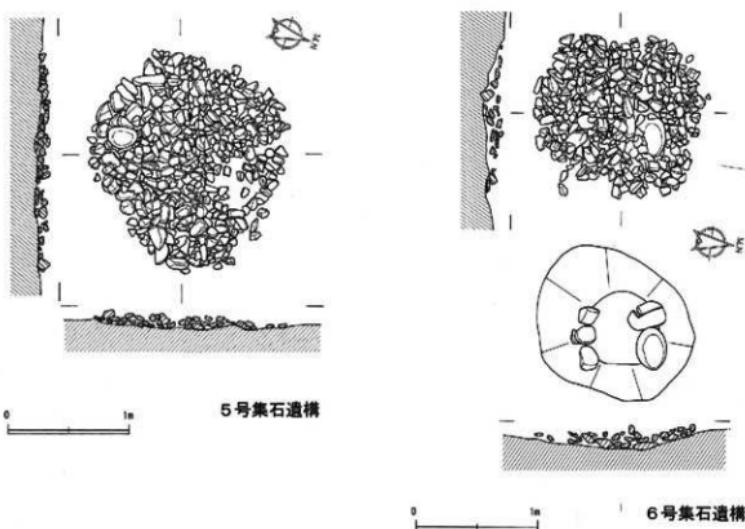


Fig. 4 第65地点 集石遺構実測図 ($S=1/40$)

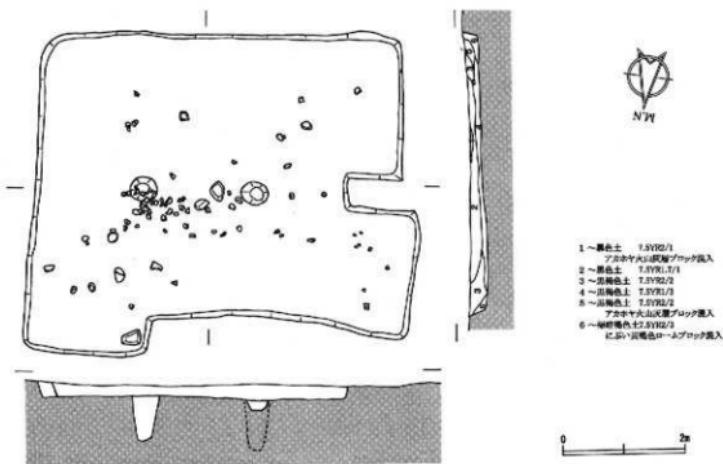


Fig. 5 第65地点 1号住居跡実測図 (S=1/80)

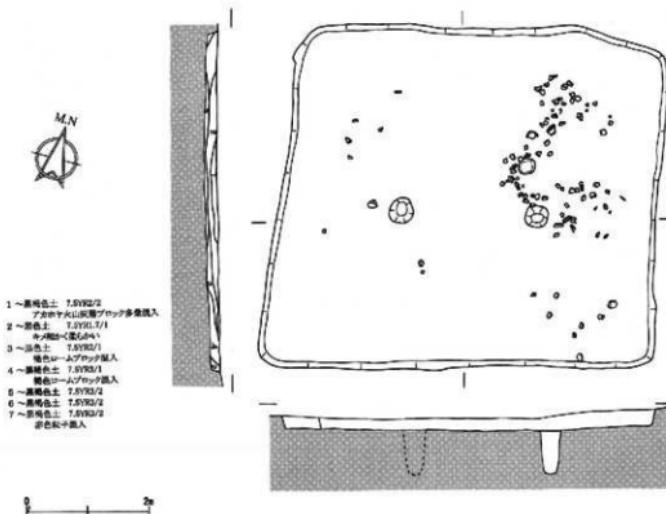


Fig. 6 第65地点 2号住居跡実測図 (S=1/180)

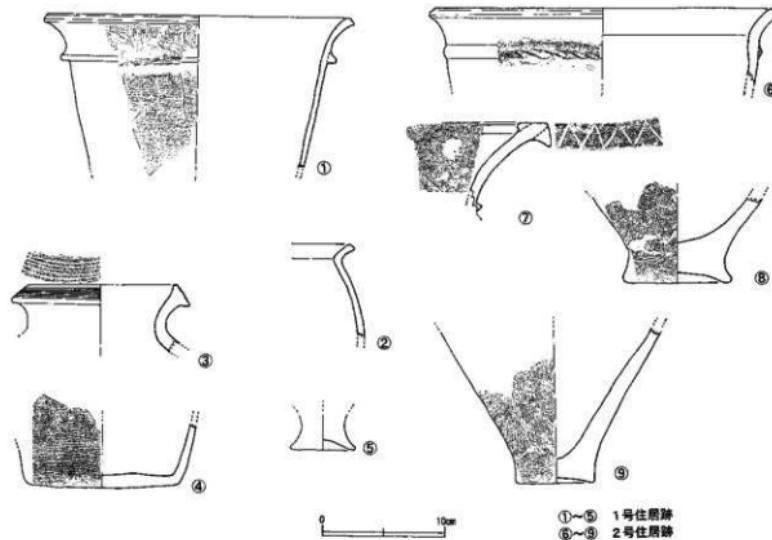


Fig. 7 第65地点 出土遺物実測図 ($S=1/4$)

も想定されることから、地権者の承諾をいただきて来年度本調査を実施することになった。

なお、この第69地点は平成5～7年度西都市が主体となり実施した圃場整備（県営農村基盤総合整備パイロット事業）の際、発掘調査において集石遺構及び焼穢群を検出した地点（2号小道路）と同畠地内である。

〈竪穴式住居跡〉

竪穴式住居跡は、広範囲の面積の割には少なく、第69地点から2軒、第74地点から1軒の総計3軒検出したのみである。

第69地点は西都原台地最北端に位置する畠地で、1号住居跡は長軸4.20m・短軸は一部対象地外のため不明、2号住居跡は径2.70mを計る円形プランのものであるが、いずれも来年度に本調査予定であり、未完掘である。時期的には、1号住居跡は不明、2号住居跡は共伴遺物から縄文時代晩期のものと推定されるが、2号住居跡は西都原台地上では珍しく、貴重な資料である。

第74地点は、寺原集落の東側に位置する畠地内から検出したもの(Fig. 8)で、長軸5.34m・短軸3.92mの規模を有する長方形プランのもので、検出面からの深さ0.30mを計る。床面は平坦で、主柱は2本である。時期的には、共伴遺物(Fig. 9)から弥生時代終末頃のものと推定される。

〈掘立柱建物跡〉

掘立柱建物跡は、第72地点から1棟検出した。2×3間の南北棟で、柱穴は径0.42m～0.56m、深さ0.40m～0.61m、柱穴間1.75m～1.90mを計る。主軸の方向はN-14°-Eで、床面積は約19.6m²と推定される。遺物は出土しておらず、時期的なことは不明である。

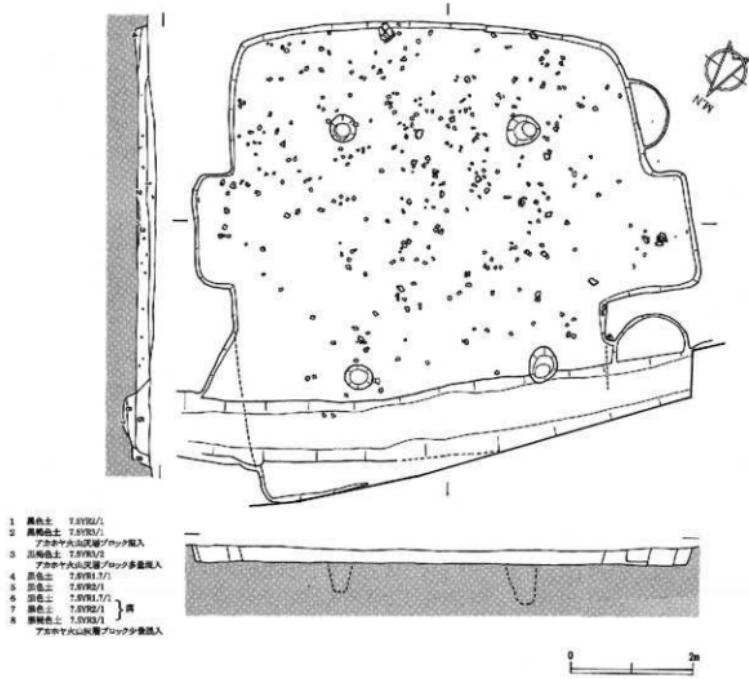


Fig. 8 第74地点 住居跡実測図 (S=1/80)

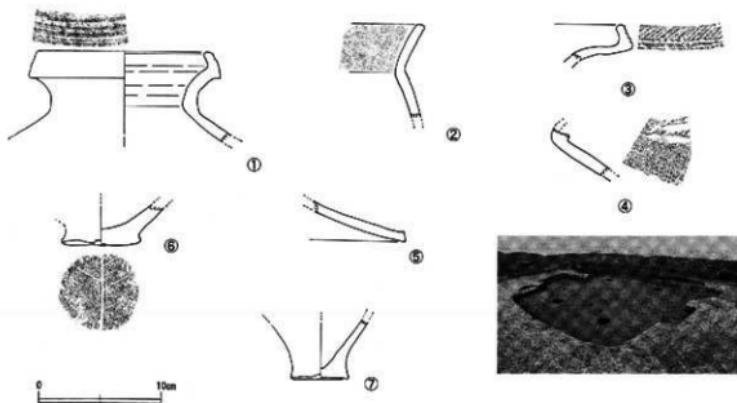


Fig. 9 第74地点 出土遺物実測図 (S=1/4)

第3節 小 結

西都原台地では、これまでに、童子丸（新立遺跡）墓地造成に伴う発掘調査をはじめ、圃場整備等に伴い行った大規模的な発掘調査（西都原地区遺跡）や昨年度までのたばこ耕作の天地返しに伴い実施した確認調査（西都原地区遺跡）によって、様々なことが判明してきた。

新立遺跡では、縄文時代早期の集石遺構や古墳時代初頭頃の竪穴式住居跡、西都原地区遺跡では縄文時代早期の集石遺構をはじめ、弥生時代中期から古墳時代初め頃の竪穴式住居跡や横穴墓群、さらには、古墳時代以降中世までの掘立柱建物跡を検出した。

また、圃場整備に伴う調査では低丘陵地に横穴墓が検出された。この横穴墓は、西都原台地上に偏在する地下式横穴墓の特徴を併せ持つことで、地下式横穴墓と横穴墓の折衷形という墓制を考えるうえでは非常に貴重な遺構として注目された。

ところで、今回の調査で、集石遺構をはじめ竪穴式住居跡6軒や掘立柱建物跡等を検出した。この中で、第69地点の竪穴式住居跡は本調査を来年度することで完掘していないが、縄文時代晩期のものと推定され、そうなると、西都原台地ではほとんど検出例がないことから注目される遺構である。また、第65地点から検出した竪穴式住居跡は弥生時代後期頃のものと推定されるが、周辺からはこれまでに圃場整備や道路拡幅工事等によって中期から後期にかけての竪穴式住居跡や土器溜りなど様々な遺構が確認されており、同時代における集落の様相が徐々に解明されつつある。

このように、今回及びこれまでの調査によって、各時代における遺跡の分布状況や特徴など少しずつではあるが解明されてきている。遺構の分布状況としては、縄文時代早期の集石遺構は西都原台地北東端部及び南東端部の周辺地域において広がりをみせている。弥生時代の竪穴式住居跡は北部・中央部・南部にまたがって分布しているが遺構密度は薄い。古墳時代の竪穴式住居跡は北西端部と西側中央部の寺原集落周辺一帯に分布しているが、全体的に遺構密度が非常に高くなっている。かなりの人たちが古墳時代になると流入し、生活環境が変化したと同時に繁栄してきたことがこのことからも理解できる。

しかし、まだまだ未解明な部分が多いというのも現状であり、今後実施される調査等によって、さらに検討を加えていかなければならないと考える。

註

- ①. 西都市教育委員会「新立遺跡」『西都市埋蔵文化財発掘調査報告書』第18集 1992
- ②. 西都市教育委員会「西都原地区遺跡」『西都市埋蔵文化財発掘調査報告書』第22集 1996
- ③. 西都原古墳研究所「西都原古墳研究所年報」第9号～10号 1993～1994
- ④. 西都原古墳研究所「西都原古墳研究所年報」第12号～13号 1996～1997

第IV章 日向国分寺跡の調査

第1節 これまでの調査結果と概要

日向国分寺跡については、前述のとおり、昭和23年に駒井和愛を団長とする日向考古調査団、また、昭和36年及び平成元年度には宮崎県教育委員会が確認調査を実施している。昭和23年の調査箇所は明示できないが、昭和36年の調査は旧五智堂及びその南側を中心に、平成元年度には寺域の北側にあたる部分(中央東西道路の北側)の確認調査が実施されている。昭和23・36年の調査は、短期間であったことから伽藍配置については明確にされていない。しかし、平成元年度の宮崎県教育委員会による調査では僧房跡ないし食堂跡と想定される2時期の掘立柱建物跡が確認されている。

西都市教育委員会による調査は、平成7年度から実施しており今年度で第8次になる。

平成7・8年度の調査では、金堂の掘込地業跡と推定される遺構や回廊跡、さらに、その回廊の外側に巡らされていたと推定される溝状遺構が検出されている。また、II地点第1・3トレーナーの溝状遺構は回廊の外側に巡らされていたものと推定され、溝状遺構の東辺が確定された。

平成9年度は、これらの調査結果を踏まえ、主要伽藍西側と北側溝の確認、主要伽藍内及び周辺の遺構等の有無確認を目的として調査を行った。調査の結果、A区から計5本の柱穴が検出され、主要伽藍に取り付くと予想される西門の存在が確認できた。また、西門北側からは南北に延びる溝状遺構(SE002)が検出され、主要伽藍を取り囲むように巡っていることが予想された。

平成10年度の調査は、西門から南北に延びる溝状遺構の範囲確認、主要伽藍配置南東側の回廊跡(推定)の確定を目的に行った。調査の結果、以前確認されていた並行したピット列が回廊跡と確定され、最低でも3回の建て替えが判明した。また、主要伽藍南側の東西幅が84mと判明した。

平成11年度の調査は、回廊が取り付く中門跡、主要伽藍に取り付く西門に相対する東門跡、そして塔跡の確認を目的とし調査を行った。調査の結果、平成7年度にトレーナー調査を行ったA区を一辺10mに拡大し、中門跡の東側半分を検出した。中門も回廊同様最低3回の建て替えが行われていた。

平成12年度の調査は、寺域南東側に想定している塔跡の確認、主要伽藍に取り付く東門の確認及び金堂の掘込地業跡の立証、また、南門の確認などを目的として調査を行った。調査の結果、東門及び金堂の掘込地業想定箇所は後世の擾乱のため断定するまでには至らなかった。塔跡想定箇所でも遺構等は確認できなかったが、南門に関しては、南門に取り付く築地壠の基壇らしき粘土層が確認でき、調査区東側に南門所在する可能性が高くなった。

平成13年度の調査は、寺域の北・西端及び寺域周辺遺跡の確認と平成元年度に宮崎県教育委員会が調査を行い僧坊跡と推定されている箇所の再度確認を目的に調査を行った。僧坊ないし食堂跡の確認されている箇所については、調査を年度末まで行ったことから本書に記載する。それ以外の箇所については、寺域端に関しては北・西端とともに宅地化がかなり進んでおり調査設定箇所の制限や後世の擾乱により遺構等を明確にすることはできなかった。しかし、北・西端ともに平安期の土器・瓦片等は多く出土しており、周辺にはかなりの生活遺構が抜がっていることが明らかになった。

今年度の日向国分寺跡の調査は、昨年度に引き続き寺域の確認を最大の目的として調査を行った。調査は寺域西端に限定し、寺域を方2町と推定した場合の隅と予想される箇所及び寺域の南西部に位置する谷の内側で寺域が北東側に延びる可能性の2つを想定し調査を行った(Fig. 10参照)。

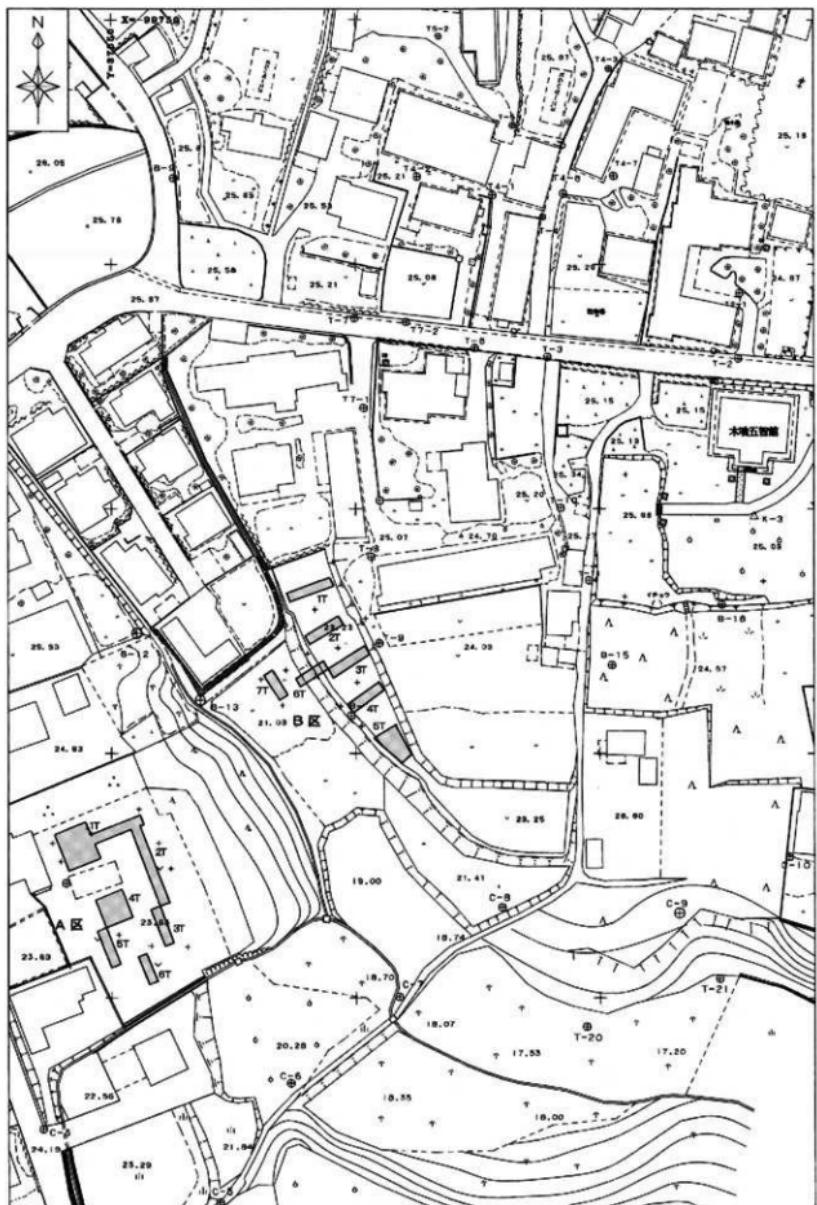


Fig. 10 日向国分寺跡第8次現況平面及びトレンチ配置図 (S=1/1,000) ■ 本年度調査箇所

第2節 調査区の設定と遺構・遺物

《平成13年度A区の調査》Fig.11

A区は平成元年度の宮崎県教育委員会の調査で、僧坊跡ないし食堂跡と推定されている箇所に設定した。平成13年度まで調査を行い、概要報告書に記載できなかったことから、以下に調査結果をまとめる。但し、出土遺物は平成13年度末の概要報告書の中で既に記載したので割愛する。

当該区は昨年度の概要報告書に記載したとおり、平成元年度の調査の折りには調査面積が狭かったこと、また、溝や東側柱穴列の性格が明確にされていないことなどの理由から再度遺構を確認する目的で調査を行った。調査は柱間の長さを考慮すると1~2m程のトレンチでは狭小なことから、トレンチの規模を拡大し、第1~5トレンチを設定した。トレンチの規模は第1トレンチが7×10m、第2トレンチが4×12m、第3トレンチが4×12m、第4トレンチが3×10m、第5トレンチが4×14mである。

第1トレンチは平成元年度に宮崎県教育委員会が2時期の掘立柱建物を確認した南側にあたる。このトレンチの南側に直径35~90cm程の柱堀形がかなり密集して確認された。以前の調査時には調査を行っていない箇所であり、ここに新たな建物跡の存在が予想された。しかし、最終的に確認された柱穴群は何らかの掘立柱建物が所在していると思われるような規則性は確認できず、新たな建物跡が所在するとまでは断定できなかった。また、このトレンチの中央よりやや西側には、平成元年度調査の第6トレンチでも確認されている幅80~120cm程の溝が南北に延びている。このトレンチで確認されている柱堀形は溝埋没後に掘削されていることから、溝掘削時より後に築かれた建物であり、国分寺創建期や最盛期に築かれたものではなく、国分寺廃絶期以降に掘削されたと思われる。

第2・3トレンチは調査区東側の南北端に設定した。ここは、平成元年度調査時に南北に延びる柱穴列が確認されている。当時の調査面積が狭かったことから、遺構の性格を明らかにする目的と当時の第7トレンチの東端に幅約2.2mの南北溝が確認されたことから、どの辺りまで延びているのかなどの目的で調査を行った。調査の結果、第3トレンチからも第2トレンチ(平成元年度第7トレンチ)同様の溝が確認できた。しかし、溝内に含まれる遺物に関しては近世の茶碗等もかなり含まれており、後世に掘削された溝であると判明した。

南北の柱穴列に関しては第2・3トレンチ内にも確認できたが、明確に痕跡が遺存しておらず南北に延びる可能性はあるが、これが寺城端に巡る柱穴であると断定するところまでには至らなかった。

第4トレンチは、僧坊ないし食堂跡とされる建物跡の北側に設定した。このトレンチでは第1トレンチから南北に延びる溝が1条トレンチ東側で確認され、また、トレンチ西側からは最下位で深さ約1.2mの南北に延びる大溝が確認されたのみである。これは、以下の5トレンチの西側にも確認できた溝と同一溝であると思われる。時期的には南側の2時期の掘立柱建物よりかは跡に掘削された溝である。

第5トレンチは、建物の北側の柱穴列想定箇所を5トレンチとして調査を行った。調査の結果、平成元年度に宮崎県教育委員会が調査を行った際に確認された建物の北側の柱穴列を検出することができた。トレンチ中央部は後世に攪乱をうけたようであり、径約4m、深さ20~30cm程の窪みが掘削されていたが柱穴は遺存していた。平成元年度に予想されたとおり、2時期の掘立柱建物の柱穴が確認され、柱穴同士が切り合わないことから前後関係は明らかにできない。柱間は南側にある掘立柱建物跡が2.4~2.7mと8~9尺、北側にある穿たれている掘立柱建物跡が2.1~2.4mと7~8尺で穿たれている。これは、平成元年度に確認されている柱間の関係とも一致する。これら、掘立柱建物の時期については、今後、出土した遺物を再度検討し判断しなければならない。

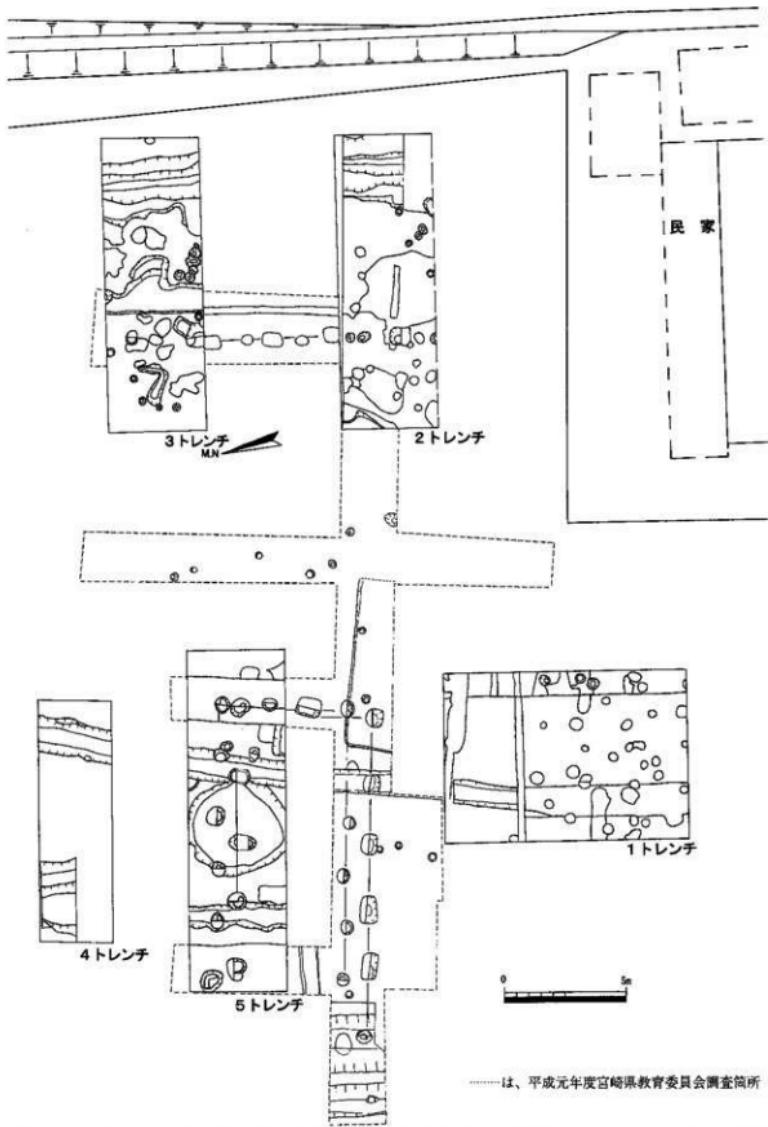


Fig. 11 第7次 C区及び平成元年度調査遺構実測図 ($S=1/200$)

《平成14年度の調査》

(A区) Fig. 10・12・14

A区は推定寺域の西側の現在、畑となっている箇所に6本のトレーニングを設定し調査を行った。掘削した結果、本来ならば表土下層の黒色粘質土上面で遺構検出を行うべきなのであるが、当地は現在も畑として利用されており、既に攪乱をうけていた。したがって、調査区全体にアカホヤ火山灰層が遺存していたことから、この層を遺構検出面とした。

第1トレーニングは最初に調査区北東端に南北2m、東西13mのトレーニングを1本設定した。調査の中でこのトレーニングの西端から東に7mの箇所内に遺構が確認されたことから、この箇所の南北に南北2mのトレーニングを1本ずつ設定し、最終的には南北8m、東西7mに拡大した。その結果、幅約2.5m、深さ約62~77cmの逆L字状遺構が確認できた。この遺構は、まだ西側に延びると思われるが西側には民家が所在していたことから、調査区を拡大することはできなかった。この溝底の平坦面には柱穴が数個穿たれていたが、規則性は確認できなかった。この遺構は、出土遺物から国分寺の盛行期と同時期の遺構であることは明確であり、この遺構のプランは国分寺伽藍の地割りと一致するなど、国分寺との関係が高い遺構である可能性が高い。但し、調査区の制限などの理由により、遺構の性格については明確にできなかった。また、1トレーニング東側に関しては、径80cm程の柱穴が北側に1個及び段落ちが南側に確認されたのみである。この柱穴に関しては、埋土が白色粘土を含んでいることから国分寺併行期の柱穴と予想されたが1個のみの検出であったことから性格に関しては不明である。

第2トレーニングは幅2m、長さ16.5mの北西から南東に長いトレーニングを設定した。トレーニング北側から2条の溝が確認されたが、これら溝は第1トレーニング西側南端にも確認されている後世の溝である。それ以外にトレーニング中央部よりやや北側にも東西溝が1条、トレーニング南側から中央部にかけて、南東から北西に延びる溝が1条確認された。これらは全て後世の溝と予想される。また、トレーニング北側及び中央部の東西溝間の平坦面には数個の柱穴も確認されたが、これも溝と同一性格のものであろう。

第3トレーニングは第2トレーニングの南側に幅2m、長さ8mで設定した。トレーニング内からは0.4~1.2m程の柱穴が多量に検出されたが、国分寺当時の柱穴と予想されるものはないようである。

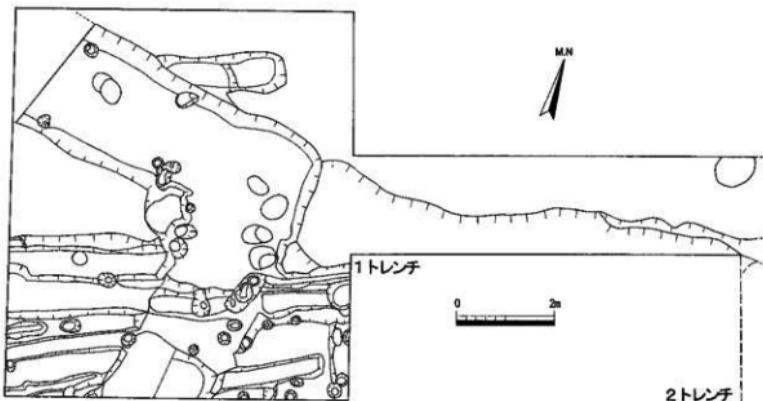


Fig. 12 第8次 A区1トレーニング遺構実測図 (S=1/100)

第4トレンチは調査区の中央やや西側に一辺6mの正方形のトレンチを設定した。トレンチ内からは第3トレンチと同様の柱穴が密集して多量に、また、中央部に南東から北西に延びる溝が1条検出されたが、国分寺当時のものではないようである。

第5トレンチは調査区南端の中央あたりに幅2m、長さ8mで設定した。このトレンチのアカホヤ火山灰層上層は南側と北側で約80~90cmの高低差があり、南側の民家が建設されている谷へと下っている。北側に数個の柱穴と中央部に南西から北東に延びる浅い溝1条、南側に柱穴1個が検出された。

第6トレンチは調査区西南隅に幅2m、長さ8mで設定した。このトレンチも3・4トレンチと同様に柱穴が密集して多量に検出されたが、国分寺当時のものではないようである。調査区全体は、後世の烟造成、それ以前には鶏小屋が所在しておりかなり擾乱をうけている。

次に、A区からは瓦片がコンテナ3箱程度出土したが、ほとんどは第1トレンチ内で検出された溝状遺構内からである。また、調査箇所の畠を以前、地主が開墾中に発見し、今回、地主から寄贈された土師器高台付塊1点と今回第1トレンチで出土した遺物を2点のみ記載する。1は、ほぼ全体が良好に遺存し、今回、寄贈された塊である。口縁部径は15.4cmで外外面とも回転ヘラ削りと回転指ナデ調整である。2は第1トレンチ西側溝状遺構上層から出土した土師器の高台付塊である。塊部から脚部にかけて2/5程度が遺存しており、外表面は坏部が回転ヘラ削り、脚部を回転指ナデ、内面は回転指ナデ調整である。3は第1トレンチ西側溝状遺構の南側下層から出土した須恵器の蓋である。全体の3/5が遺存しており、口縁部復元形は11.6cmである。天井部には中央がやや窪んだ偏平な摘みが付く。口縁部端は僅かではあるが嘴状に曲がる。天井部から約1/2あたりまで回転ヘラ削り調整である。

(B区) Fig. 10・13・14

B区は平成10年度に調査を行い回廊の南東端と推定される箇所の南東側に7本のトレンチを設定し調査を行った。この箇所は、前述のA区との間に北西から南東に標高28.2~18.7mの谷が所在しており、この谷を越えて寺域が所在することは疑問視されることから、南門想定箇所から延びた寺域ラインがこの谷の手前で北東側に折れ曲がることを考慮して設定した。

第1トレンチは調査区上段の北端に設定した。トレンチの規模は2×9.5mである。このトレンチは東端から中央で約7.8mまではほぼ平らな面が続き、そこから約28°の傾斜で下の谷へと延びる。

第2トレンチは第1トレンチから約6~7.5m南に設定した。トレンチの規模は2×8mである。このトレンチは東から西にかけて3段の段落ちで形成されている。まず、径約40~50cmの円形の窪みが3つ並び、その下のテラスに至る。この2段目のテラスは最終的には赤みを帯びた窪みになったが詳細は不明である。第3段目のテラスはトレンチの西端に至るために規模は不明であるが、この箇所の南

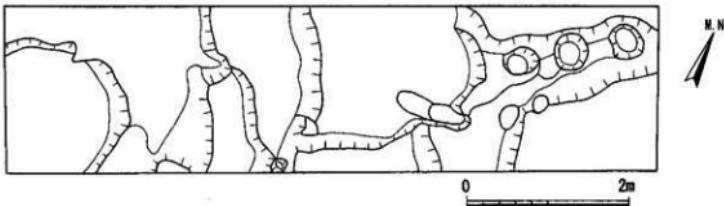


Fig. 13 第8次B区2トレンチ遺構実測図 (S=1/60)

よりに径約1.9m、深さ45cm程の円形の窪みが確認された。この窪み内には少量の土師器及び瓦片が確認されたが、どのような性格の遺構であるかは明らかにできなかった。この第3トレンチで確認された遺構は、あくまでも推測の域を脱し得ないが、もしかすると東側から西側にかけて降り口を設けた、簡易な窓の可能性も残る。しかし、鉄滓や炭化物はほとんど出土しておらず、最終的には不明である。

第3トレンチは第2トレンチから約6m南に設定した。トレンチの規模は2×8mである。このトレンチの南西側に北西から南東に延びる溝2条、柱穴が1個確認されたのみである。

第4トレンチは第3トレンチから約6m南に設定した。トレンチの規模は2×8mである。このトレンチの東端には北西に延びる溝状遺構が確認された。この西側に関してはほとんど平坦な面で構成され、明確な構造等は確認できない。但し、この平坦面からは多量の瓦片が出土した。

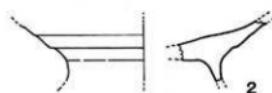
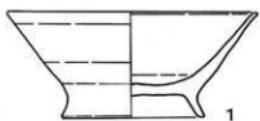
第5トレンチは第4トレンチから約6.5~7m南に設定した。トレンチの規模は地形の制約から短辺3~5m、長辺7~7.6mの台形である。このトレンチは東端には幅0.7~1m程の溝が1条確認されたが、これはおそらく、その上の畠との地境の溝であろうと思われる。このトレンチは東端から約1.5~2mまで平坦面が延びそれから、徐々に傾斜を帯び谷へと延びる。

第6トレンチは調査区中央部北よりに第3トレンチ北端に南端を合わせて、谷底に向けて設定した。トレンチの規模は2×6.7mである。このトレンチは上位で約0.2m、下位では最高1.3mまでは近世の擾乱や流土で覆われており、国分寺当時の段落ちよりかなり谷側に延びていることが明らかになった。このトレンチの西端にも幅0.9~1m程の溝が1条確認されたが、これも地境の溝であると思われる。

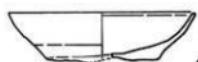
第7トレンチは調査区西側の谷底に北西から南東に長い2×6mのトレンチを設定した。このトレンチ内からは遺構は確認できなかったが、床面にはぎっしりと瓦片及び砂利が堆積していた。

B区からは瓦片、土師器・須恵器片、陶磁器片など全部でコンテナ28箱分の遺物が出土した。内6点のみ記載する。4は第2トレンチ西側第3テラス上層から出土した土師器の皿である。底部の一部を欠損していたがほぼ全体が復元できた。口縁部復元径は11.5cmである。底部外面は回転ヘラ切り未調整、脚部から口縁部は外面とも回転指ナデ、内面底部は指オサエと不定方向ナデ調整である。5は第2トレンチ西側第3テラス下層から出土した土師器の高台付塊脚部と思われる。塊部中央から口縁部を欠くが、塊部下位から脚部はほとんど遺存している。一般的な脚部とは異なり、肉厚で底部中央部のみが窪む。外面は底部が指オサエ、脚部は回転指ナデ、塊部は回転ヘラ削り、内面は回転指ナデ及び不定方向ナデ調整である。6は第4トレンチ東端南側ピット内から出土した土師器の高台付塊である。塊部から脚部にかけて3/5程度が遺存しており、口縁部復元径は14cmである。外面は塊部が回転ヘラ削り、脚部を回転指ナデ後不定方向ナデ、内面は回転指ナデと不定方向ナデ調整である。7は第5トレンチ中央南側斜面下層から出土し、塊部内面と塊部口縁部から2/3あたりまで施釉されている台付塊の完形品で、口縁部の復元径は17cmである。外面は脚部内面が回転指ナデで他は回転ヘラ削り、内面も回転ヘラ削りで調整されている。8は第2トレンチ西端窪み上層から出土した軒丸7類である。瓦当面は完形であるが丸瓦部は一部遺存するのみで、瓦当径は13cmである。蓮弁は7葉からなり中房中央はやや窪む。9は第2トレンチの東端最上段ピット内から出土した軒丸8a類である。瓦当面の1/4程と周縁部が一部が遺存しているが、丸瓦部は瓦当部とナデ付けた箇所が遺存しているのみである。単弁7葉であり、内区珠文は1+4の配置をとる。瓦当の復元径は18cm程と思われる。10は第7トレンチ中央やや南側下層から出土した軒丸3b類である。瓦当面の内区はほとんど遺存し、復元径は19cm程になると思われる。単弁11葉であり、内区珠文は1+5の配置をとる。

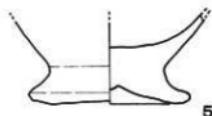
A区



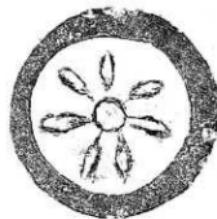
3



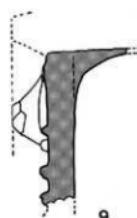
4



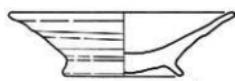
5



8



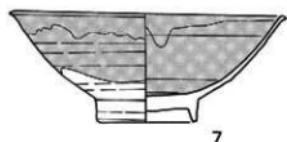
9



6

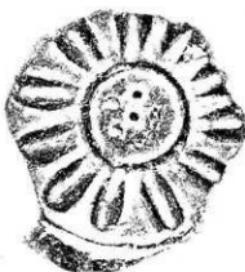


10



7

※ 土器のアミかけ部は施釉



10

Fig. 14 日向国分寺跡第8次出土遺物(S=1/3)

第3節 小結

本年度の日向国分寺跡の調査は、平成14年6月3日から平成15年1月10まで実施した。

西都市教育委員会が国庫補助を請けて行う日向国分寺跡の調査は、平成7年度から行われており本年度で第8次になる。

今年度の日向国分寺跡の調査は、昨年度に引き続き寺域の確認を最大の目的として調査を行った。日向国分寺跡は以前から方2町と予想されてきたが、現在までに寺域跡は明確にされておらず、平成12年度には南門想定箇所、昨年度は寺域北及び西端と予想される箇所を調査してきたが、寺域を示すような遺構については明確にできていない。

昨年度までの調査で平成7・8年度は主要伽藍を取り巻くと思われる溝状遺構や金堂の推定壇込地業跡、平成9年度は主要伽藍に取り付く西門跡の確認、平成10年度は主要伽藍南東側の回廊跡が確認でき、最低でも3回の建て替えが行われていることが明らかになった。平成11年度の調査では中門も回廊同様、最低3回の建て替えが行われていることが判明した。1・2期目の建て替え時は回廊同様掘立柱建物であったが、3期目に建て替えられた中門は礎石建物となり規模も拡大し、回廊の外側を取り巻く溝が埋没した後に建立されていることなどが判明した。平成12年度の調査では主要伽藍に取り付く東門跡は擾乱が著しく、塔跡に関しては基壇と思われる遺構等は確認できなかった。また、金堂の掘込地業想定箇所に関しては、現在、墓地が周囲に所在しており擾乱が著しく、礎石痕跡の確認や掘込地業跡であると断定するまでは至っていない。南門想定箇所に関しては、南門に取り付くと想定される築地塀の基壇らしき粘土層が確認できた。昨年度の調査は、寺域端に関しては北・西端とともに宅地化がかなり進んでおり調査設定箇所の制限や後世の擾乱により遺構等を明確にすることはできなかった。しかし、A・B区ともに平安期の土器・瓦片等は多く出土しており、周辺にはかなりの生活遺構が拡がっていることが明らかになった。また、以前より僧坊跡ないし食堂跡とされているC区では、2時期の掘立柱建物の南側に新たな建物と予想させる柱穴群が確認された。確認された建物跡は、その調査区内を南北に走る溝が埋没した後に建立されているとみられ、国分寺創建期には存在しない可能性が高くなった。

今年度の調査は、寺域端の確認を最大の目的とし調査を行った。日向国分寺跡の寺域は以前から方2町と予想されており、中軸線及び南門想定箇所から推定した寺域南西端が畠(A区)として利用されていたが、調査をさせていただけたこととなった。また、この箇所の東には西都原台地からの湧水で形成されたと思われる谷が所在し、この谷を寺域内に取り込むことは疑問視されたことから回廊南西隅の南西側の畠(B区)も調査対象区とした。

調査の結果、A区からは寺域端を示すような遺構は確認できなかったが、日向国分寺と地割りを供にする溝で囲まれた遺構が確認された。また、B区でも寺域端を示すような遺構は確認できなかったが、第2トレンチで簡易な窯跡らしき遺構が確認された。両地区ともに多くの遺物も出土し、新たな資料が増えたことは、今後、調査箇所の設定や日向国分寺跡の全貌を解明するために大きく反映されることと思われる。

来年度の調査も今年度と同様に寺域端及び周辺遺跡の確認調査を中心に行っていく予定である。しかし、近年、日向国分寺跡周辺も宅地化が進み、以前までに確認されてきた重要な遺構包蔵箇所も開発の危機にさらされているのが現状である。今後、将来の遺跡の保護・活用を見据えた現況の確保も大きな課題である。

図版 (PLATES)

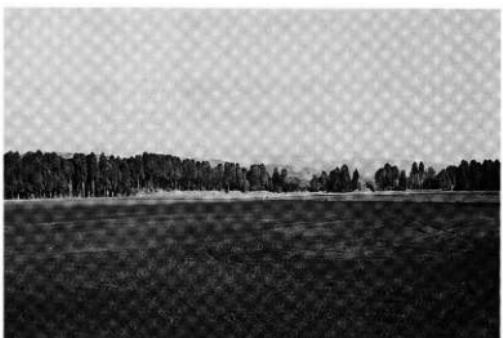
図版目次

—西都原地区遺跡—

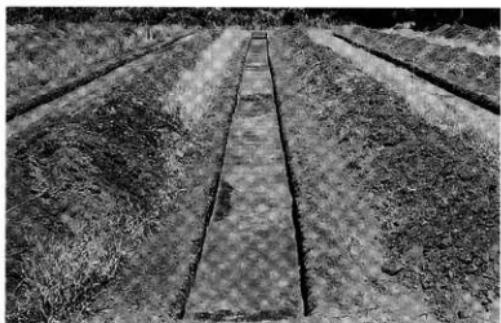
- PL. 1
1. 西都原地区遺跡近景
2. トレンチ調査状況(第69地点)
3. アカホヤ火山灰下層調査状況(第79地点)
PL. 2
4. 第65地点近景(空撮・西より)
5. 第65地点遺構分布状況(空撮・真上より)
PL. 3
6. 第65地点5号集石遺構検出状況
7. 第65地点6号集石遺構検出状況
8. 出土遺物(第65地点)
9. 出土遺物(第71地点)

—日向国分寺跡第8次—

- PL. 4
10. 第7次C区第5トレンチ遺構・遺物検出状況(西より)
11. 第8次A区第1トレンチ遺構検出状況(西より)
12. 第8次A区第2トレンチ遺構検出状況(北西より)
13. 第8次A区トレンチ掘削状況(南東より)
14. 第8次A区第6トレンチ遺構検出状況(南東より)
PL. 5
15. 第8次B区第2トレンチ遺構検出状況(北東より)
16. 第8次B区第2トレンチ
南西土壤・遺物遺構検出状況(北北東より)
17. 第8次B区第4トレンチ遺構検出状況(北東より)
18. 第8次B区第5トレンチ遺構・遺物検出状況(北西より)
19. 第8次B区第6トレンチ遺構・遺物検出状況(北東より)
PL. 6
20. 日向国分寺跡第8次出土遺物



1. 西都原地区遺跡近景



2. トレンチ調査状況（第69地点）



3. アカホヤ火山灰下層
調査状況（第79地点）



4. 第65地点近景（空撮・西より）



5. 第65地点遺構分布状況（空撮・真上より）



6. 第65地点 5号集石遺構検出状況



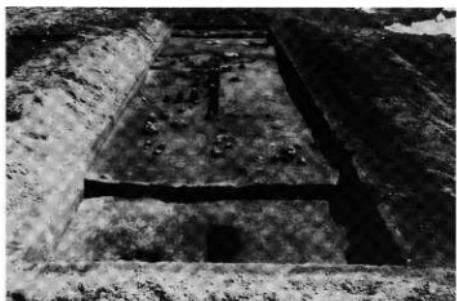
7. 第65地点 6号集石遺構検出状況



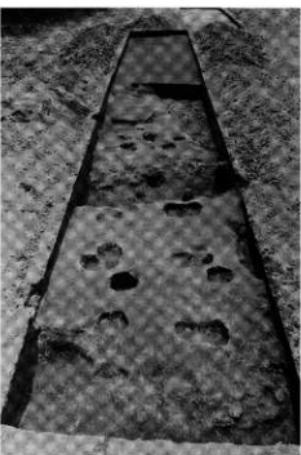
8. 出土遺物（第65地点）



9. 出土遺物（第74地点）



10. 第7次C区第5トレンチ遺構・遺物検出状況（西より）



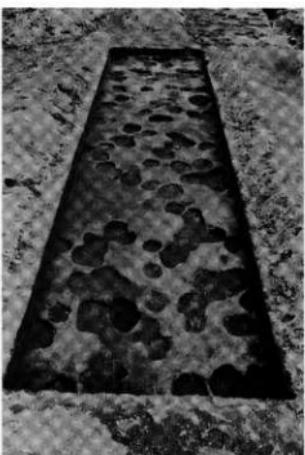
12. 第8次A区第2トレンチ遺構検出状況
(北西より)



11. 第8次A区第1トレンチ遺構検出状況（西より）



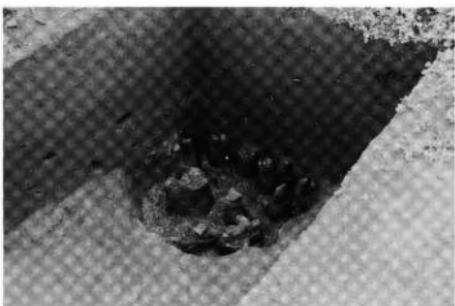
13. 第8次A区トレンチ掘削状況（南東より）



14. 第8次A区第6トレンチ遺構検出状況
(南東より)



15. 第8次B区第2トレンチ遺構検出状況
(北東より)



16. 第8次B区第2トレンチ南西土壙・遺物検出状況
(北北東より)



18. 第8次B区第5トレンチ遺構・遺物検出状況(北西より)



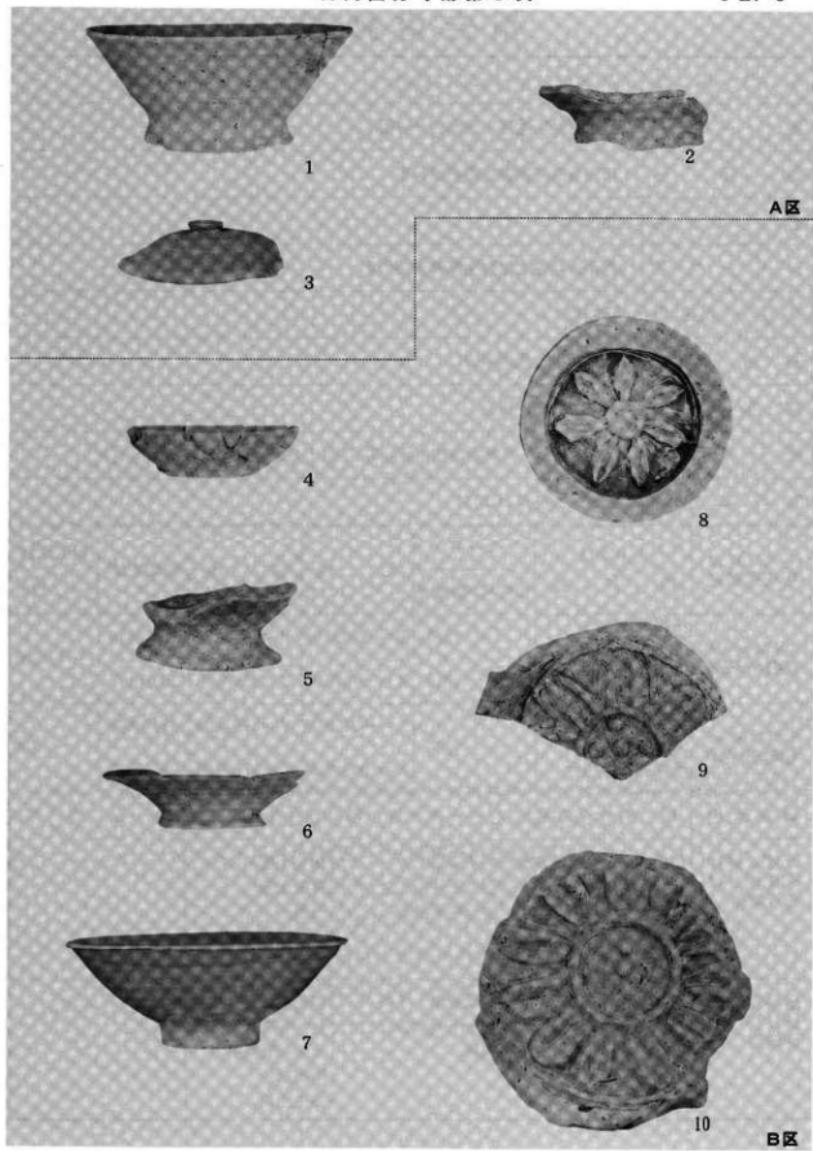
17. 第8次第4トレンチ遺構検出状況
(北東より)



19. 第8次B区第6トレンチ遺構・遺物検出状況(北東より)

一日向国分寺跡第8次

PL. 6



20. 日向国分寺跡第8次出土遺物

報告書抄録

ふりがな	さいとばるちくいせき・ひゅうがこくぶんじあと						
書名	西都原地区遺跡・日向国分寺跡						
副書名	市内遺跡発掘調査概要報告書						
巻次	第8集						
シリーズ名	西都市埋蔵文化財発掘調査報告書						
シリーズ番号	第36集						
編著者名	義方政幾・笠瀬明宏						
編集機関	西都市教育委員会						
所在地	〒881-8501 宮崎県西都市聖陵町2丁目1番地 TEL 0983-43-1111						
発行年月日	西暦 2003年3月31日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (m ²)
		市町村	遺跡番号				
さいとばるちくいせき 西都原地区遺跡	みやざきけんさいとし 宮崎県西都市 おおざみやけらばるわき 大字三宅寺原駅 他	1026 & 1029	X=-99000.00 & X=-97000.00	Y=36000.00 & Y=36800.00	20020806 & 20030117		11.000
ひゅうがこくぶんじあと 日向国分寺跡	みやざきけんさいとし 宮崎県西都市 おおざみやけあごくぶ 大字三宅宇国分	1008	X=-99750.00 & X=-99950.00	Y=37600.00 & Y=37750.00	20020603 & 20030110		300
調査原因	種別	主な時代	主な遺跡	主な遺物	特記事項		
たばこ耕作 天地返しに 伴う調査	生活遺構	縄文～中世	集石遺構 竪穴式住居 掘立柱建物跡	縄文土器 弥生土器 石器			
遺跡所在確認に伴う確認調査	国分寺	奈良～平安	溝状遺構 1条 ビット(柱穴) 窯跡	軒先瓦片 丸・平瓦片 土師・須恵器片 陶磁器片 弥生土器			

『西都市埋蔵文化財発掘調査報告書』第36集

「市内遺跡発掘調査概要報告書」VII

西都原地区遺跡・日向国分寺跡

平成15年3月31日発行

編集発行 西都市教育委員会

印刷所 吉永印刷
